
* * 冬に出会う不思議な恋. * *

春風ななこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

* * 冬に出会う不思議な恋 * *

【Zコード】

Z3047A

【作者名】

春風ななこ

【あらすじ】

このお話は、恋愛はもちろん、友情も入った、作品集です。みんなが読める、感動の恋話集。

1+サンタ・クロースからのプレゼント（前書き）

さえない。と、いうか、積極的に行けないイケメンの主人公。毎年送る寂しいクリスマス。。さてどうなる今年こそ・・・！？

1+サンタ・クロースからのプレゼント

今年もやつてきた。この全世界を探しても、きっと俺以上にこのクリスマスを寂しく過ごす奴はいないだろう。だからと言って、好きな奴がないわけじやねえ。同じ大学に通う、東城友紀乃。学園一の美人だ。毎年毎年、俺はいつものケーキショップでサンタの着ぐるみを着て、寒さにたえながら『いらっしゃーい』なんて言つている。この気ぐるみを着てたら、よく同年代らしき可愛い口に、抱き着かれて、『きやーっかわいいー、サンタさん、写メ撮るー。』と、言われるのだが、中身に入っている本当の姿を見たらどうなるんだろう。。。明日はクリスマスイヴ。日本人は、本命のクリスマスより、イウの方を大切にするらしい。

「こんなにちはー。」

ケーキショップにまた来て、サンタになる。

「よう。サンタ。今日はやっぱりくる人少ないねー。25日まで、休暇撮る女の子がいっぱいであこつちは店の売り上げが目まぐるしいって言うのにね~。」

「は、はあ。」

日本語の表現がちょっとおかしいこの店の店長が言う。確かに、毎年ここのがる度に思うのだが、パティシエの女の子以外はほとんど休んでしまう。ただでさえ俺がサンタの格好なんてしなくとも売れる人気のケーキショップで、大変だと言うのに、彼氏や友人のためにこの3日間をすんなり休むなんぞ、なんたる事か!と、思う。そんなふうにまた今日も忙しく過ごしていった。夕方の一山を超えた後、休憩をする。30分程だが、疲れで爆睡する。20分後に目を覚まし、少し動いてから、またサンタになる。でも今日は、疲れのせいか、眠気がなかなかとれない。しかし、表に出て、客を集めていると、思わぬ事が目に飛び込んできた。

「と···つ···東城 友紀乃···！」

小さい声をあげた。そして、一気に目が覚めた。彼女は、泣いていた。そして、サンタの俺を見て、走り去つて行つた。まるで、中身の俺を見る様に。澄んだ瞳で、睨んだ感じ。でも、強くて、とても哀しい瞳だった。

別に、俺は自分で言つのもなんだが、不細工ではない。イケメンサイドで、馬鹿ではない。まあ、大学が、東X大学と、言う時点で分かるが。しかし、魅力と積極性がないようだ。仕方ないだろう。この世で一番苦手なのは、女なんだから。しかし、それにしても、今日の東城の顔は忘れられない。俺は、ベットの中で、彼女が何故泣き、何故俺を見たのか、問つた。

「ま、サンタの格好だったからな。」

俺は、悲しく開き直つて、寝てしまった。

サンタサンタサンタ（前書き）

東城さんの泣いていいる理由がよく分からぬまま、なんか、意外な
展開に…どうなる、俺！

サンタサンタサンタ

次の日、奇跡の様な事が起こった。俺は、いつもの様に、友達と学食に行こうとした。しかし、学校中が、クリスマスマードで意氣だつている。なので、

「わりいな。今日は、彼女と飯食うんで。ヨロシク。

「え。」

「おつと、今年は食べる相手いるんで。」

「ええ . . 。」

次から次にみんなが去ってゆく。そして、仕方なく弁当を買つてきて、教室の席に着いた。すると、なんと、この教室をよく見てみよ！俺の他に、独りの奴がいる！—それも、あの、東城だ . . . !

そういうえば、彼女は、友達がいないわけではないが、特定の人とはあまり付き合っていない。でも、あの美貌の持ち主と言つのに、彼氏一人いないとは . . . なんたることかっ！

「いや、待てよ。」

ちよつと遅れて迎えにくるかもしれない。つでも、つでも。話し掛けたい。でも、でも . . .

・ . . だあああああ！—！—！—！

「よし。」

俺は、静かに立ち上がり、息を整え、自然に自然に、ものす「—く自然に話し掛けた。

「東城、さん。隣いい？」

チツ、噛んだ . . 。 東城は、少しためらい、うなづくと、少し端に避けた。なんだか、大人しい彼女のせいか、昨日見た表情が妙に重なる。まあ、仕方ないか。多分、今日もまた昨日の事を引きずつていてるであろう。でも、何があつたんだ？気になった。でも、こ^ーこは、まだ慎重に。。

「あー、今日も寒いね。」

「そうですね。

「夕方雪だつてよ。今日の天気予報見た?」

「ええ、ホワイトケリスマスですって。」

何となく素っ気無い返し方だった。たけど、ひるまんぞ！

御批欽定四庫全書

「俺が、あの、聞こえます？」

「はい。」

「あのさ、毎年毎年さ、あの、ケー・ギ屋知つてるかな? ラ・メゾン・デュ・ボワーズ』つてところで、チラシ配つてんの。クリスマスクくるたんびに鬱なんだよ。サンタの格好してさ、彼女がいなくて毎年辛い辛い……ほんと、もう……。」

東城を見たトキ、としたがなり冷たい目線で「それかなはか？」と、言いたげな目だった。やばい。多分、いや、きっと、昨日泣いていたのは、彼氏かなにかに振られてんだろう。怖つ。「は、ははは。ごめんね。こんな話して。」

またまた心臓がドキッとした。（米国風に言えば、サンプサンプ那

訳：・ジキドキつて、感じ。)

「見てたんですね。昨日。」

一
え、
あ、
う、
うん

東城は苦笑した。そして、次の瞬間、信じられない言葉が飛び出た。

！？俺は、考えずに、即、

「バイトが終わつたら、がら空きだけど？」

と、返した。この言葉を、言い返した俺の脳内は、今までにないく

いた。『やべえ！』を繰り返して

「じゃあさ、バイトが終わつたら、『ローズ・ホテル』に来て。場所、分かる?」

「え、お、う、あ、う、うん。」

俺は、いやらしい方向を次々に脳裏に巡らせていた。今日の帰りに薬局で（マツキヨ）コXXXXム買わなきや しづらぐ、勉強についての雑談をしたあと、メアドを交換して別れた。

午後9：30 12月24日『ベリー・ローズ』のホテル前。多分『ローズ・ホテル』とは、ここのことだろう。町は、クリスマスで、いつそう盛り上がっていた。俺は、サンタの格好の頭の部分以外下がそのまんまで、やってきた。町のカツプルを引き離しながらここへ来る途中、恥ずかしさはなかつた。東城の事、それだけで頭がいっぱいだつた。まあ、この季節だし、このイベント中だし、この格好で歩いても珍しいだけで、怪しまれはしないだろうからな。

「うめんなさい、待たせた？」

俺は、首を横に振った。

「やつ。ならいいけど、クリスマス空いてるかい、手伝ってくれるかなと思って。ごめんね。ホテルなんかに呼び出しちゃったから。え?どうゆう事なの?

「今夜は、大変だわ。港周辺の子供達の担当なの。さ、いきましょ。あ、それに、丁度良かつた。その格好で来てくれて嬉しい。」

え。
待つて。
何? なんなの?
?

「あ。いけない。言ひ忘れてた。私は、サンタクロース。さあ、プレゼントを配りましょう。」

まつてくれ！予想外すぎるぞおおおおおおおおおおおおおお！――！――！

おべつかの（前書き）

本当は、恋愛のストーリー。『俺』は、ついに、サンタを手に入れ
る。

そして、わけの分からぬまま、真っ赤な車に乗せられた。ピカピカ光る、きれいなオープンカー。ドアの中央に、白のラインが入っている。結構高級な車だ。反射的に、乗ると、シートベルトをして、上着を整えた。足下は、寒くはないが、上半身が冷たい風に刺さる。

「出発。シートベルト、した?」

፩፻፲፭

変なエンジンがかかる。すると、暖房も同時にかかつた。そして、なんど、次の瞬間、車が空高くあがつた！！

「あ、あの、二え、あんまりだよなーでね。

「はい。」

俺は、町にいるカツブルに薬局で買ったマツキヨコムを投げ付けた。当たりはしなかつたが、まあ、いいだろう。しかし、本当に信じられない。どんどん町を過ぎ、港周辺に来た。高層マンションが幾つか並んでいる。

「これを見て」

東城は、地図を差し出した。色々なマンションの地図だ。

「このマンションは、個数が書いてるの。配るプレゼントのね。そして、マンションの名前が、プレゼント一つ一つに書かれているから、屋上についたら、そのマンションの名前を書いたプレゼント

卷之二

「やあどうも、フレデリックが勝手に頼り持ち主のところへ行くわ。

「えーつ。

「はじめようか。」

東城は、袋を俺に渡し、地図もついでに渡して、ある高層マンション

ンの屋上に降りした。置き終わつたら、連絡してね。と言い、彼女は、隣のマンションに行つた。

「えー、ここには、パークコード。一番館。」

袋の中に手を入れる。結構至難の業だつた。一応、見つけやすい様にと、色でわけてある感じはするが、なかなか見つからない。大小様々なもので、もちろん、堅さが一定と言うわけじゃない。ぬいぐるみらしき物もあれば、箱に入った物もあるし、なんじやこりや！？！と叫びたくなる様な感触のもつた。まあ、動物はいなさうだが、変に箱が揺れ、なから、子犬が鳴いていたりした。かわいそうに。持ち主が目を覚ますまで、待つていなきゃならんのか。

「これくらいかな。配り忘れないか。」

もう一度確認して、まだあつた、と、また袋を探つていると、もう白い袋をぺったんこにした東城が迎えにきた。

「やつぱり初めての仕事は、きついね。」

と、言い手伝う様子を全く見せずに、さつさと次の袋を手前に出す。

「よし。」

「いい？ 次行こう。」

俺は、急いでまた車に乗る。俺の袋には、まだあと2塔分のプレゼントが入つていた。車が離れるとき、俺は、またまた信じられない光景を目の当たりにした。プレゼントが、光つて、消えたのだ。きっと、『願う持ち主』の所へ行つたのだろう。

「あのや、じゅうゆうプレゼントって、誰が用意するの？」

俺は、素朴な質問をした。だって、東城が全部買ううなんて、経済的に無理だろう。

「ん？ えつとね、このサンタの洋服の色は、会社のイメージカラーなの。」

「赤と白？」

なんだろうと首を傾げた。（ここ以降、実話）

「正解は、コカ・コーラ。うちの会社がやってるんだよ。サンタのはじまりは、ずーっと昔。ある絵本に登場した、黒と緑の小人がは

じまりなんだ。まあ、モーテルは、知ってる人も多いと思うけど、二コラスって言うお金持ちの優しいおじいさんが、ある貧しい家族の家の靴下に金貨を入れたのが元になってるんだけど。」

「へ、へえー。」

「そこで、ある日、コカ・コーラ社が、こんな小人じや、親しみにくいだらうと言つ事で、人と同じ大きさに実現。そして、洋服は、我が社のイメージカラーについて。（ここまでは実話）そして、伝説だけじゃあ、なんだから、この有り余る経済力を、世界の子供達へ。と、言つわけ。」

俺は、かなり納得。

「じゃあさ、までよ、この車つて・・・。」

「そう。世紀の大発明！！飛ぶ車！でも、これを売りに出しちゃうと、私達の正体がばれるし、犯罪にもなり兼ねない。騒音もかなり下げた究極の車だよ。最初は、まあ、爆発音がつるさくってたまんなかつたけどね。」

「へ、へえー。」

ただ、ただ、うなずくだけだった。最後に、ここ周辺のプレゼントを配りまくった。2回目の配達は、まだ慣れていないなかつたが、3回目は、さつきと量が多いのに関わらず、結構早くに配り終えた。やつと終わつた！と、思いきや、しばらくして、やけに荷物を積み過ぎた大きな車がやってきて、その半分を、東城の車に乗せた。まだか。と、俺はがっくりとひざをついた。

「よし、次は、あの地区だよ。」

さつき配つた所とあまり離れてはいない場所だった。でも、今度は、大変。普通の高級マンションならまだしも、一軒屋も混じっている、一般的な住宅地だった。今度はさつきよりも疲れた。一軒の家に、プレゼントを何個も置いてゆくならまだ軽い。少子化？はあ？一軒に一つ、二つ、三つ、ざつこんなこのヤロー――――――――お笑い芸人の魔になりつつ、仕事を進めた。時々、屋根から『サンタさんありがとうまたらいねんもきてね』と、非常に読みにくいやでか

かれたお礼の手紙や、チョコやクッキー、あるいはケーキやワインなどのお酒もプレゼントが消えると同時にやつてくる事もあった。まだお礼の物を置いてなかつた分は、明日に、『届くらじい』（東城情報。）

「さて、終わりました。いてて。」

仕事が済んだのは、午前26時。東城は、俺の2~3倍の配達をした。

「お疲れ。」

「お疲れ様。」

俺が声をかけると、丁寧な言葉で返してきた。おっと、いい忘れていたが、屋根から屋根に移る際は、『飛ぶブーム』で簡単に移れた。それと、プレゼントが消えたり、あらわれたりする現象は、不明。（苦笑。）

「なんか、買つてこようか？」

「うん。暖かいのがいい。」

「了解。」

俺は、ポケットから財布を出し、ココアとコーヒーを買った。

「どうぞ。」

「ありがとう。」

ちょっとへんな状態で止まっている赤のオープンカーを除けば、普通の公園に、仲良くベンチに座るカシプルだった。夕方からちらりつく雪が、さつきから静かに、本格的に降り始めた。

「あのわ、ここで聞くのは、なんだけど、なんで、昨日……。」

「ああ、泣いていた理由？ 気にしないで。『サンタ』の仕事で、毎年彼に会えないの。そしたら……。振られちゃった。」

彼女は、寂しそうに笑つた。それが、なぜかもつと胸にキュンときて、抱き締めたかった。そうだ、俺、本当は、こいつの事が好きで、今日のあの昼までは、話す事もかなり困難だった。でも、今は、彼女を『サンタ』として、見ていて、でも、ふとその見方から外れると、何故か、こんなにも……。

「あ。そうだ。」

東城は、言った。

「まだ、君にプレゼントしてなかつたね。」

東城は、真つ直ぐ見つめた。この俺を . . . 。だめだ。我慢できない !

「サンタ・クロース！ 俺は、貴方の事が、好きだ！」

本名じやなく、何故か、この名前でいきなり告つてしまつた！！！

！相手もびっくり。

「私は、まだ、彼と別れたばっかりだから、今は、何も . . . だから . . . その . . . 」

やつぱり、言うんじやなかつたと、気持ちを抑えきれなかつた自分を悔やんだ。

「毎年、この季節だけ、私が、サンタクロースからのおくりものとして、貴方と付き合つなら . . . それなら . . . いいかも。」

俺は、言葉を繰り返した。

「サンタ・クロースからのおくりもの . . . 」

翌朝、今年は、ドタキャンでバイトを休み、東城と出かけた。初めて予定のつまつた日だった。それから、俺は、彼女がいない物の、クリスマスは、子供へのプレゼントを片手に、町を飛び回り、サンタ・クロースとともに、この日を送る。

そして、今年も . . . 。

夢を壊す様な言い方かもしれないが、クリスマスの夜、鈴の音と、あのエンジン音が聞こえてこないか？まるで、爆発するみたいな . . 。それは、きっと俺達だ。毎年自分の割り当てられた仕事をしてくる。サンタは、各地にいる。みんな、赤いオープンカーを飛ばしてがんばっているんだ。

では。また。**メリークリスマス**

おつかのめい（後書き）

このお話を、恋愛ものにつなげるのに苦労しました。でも、良く考えてみて下さい。サンタ・クロースの女の子が、彼女って、ロマンチックですよね。わたしも、サンタ・クロースが彼氏だったらな。

2 + 前世の記憶。 (前世を)

今度は、運命を感じるスーパー・ラブストーリー。ファンタジックなお話ですが、何故か、そこが重要になってくる。

ソウル・メイト。貴方は、この言葉を知っているであろうか？これは、前世からずっと結ばれているいわば、『運命の赤い糸』の様なもの。このタイプは三つあり、『殺しに来る者』『助ける者』『真の恋人』が、居る。貴方は、この物語を読んで、幼い自分を、もつともつと大人出来るはず。

秀學館高等学校。2年。私は、寒い冬、空を眺めながら、数学の宿題をひとつと終わらせていた。おっと、遅れました。私は、山名唯。いつも冬になると、鬱々てしまつ。何故だか知らないが、毎年、毎年、鬱々するのだ。今年は、最高に鬱々している。それから、鬱々するのは、毎度の事なのだが、その気持ちと同時に、不思議な気持ちになる。その感覚が、今年は、もっともつとはつきりしてい る。今年は、何故だろう？

「ゆー、ゆー、ゆーーー！」

友達が、呼んでいるのに、遅れて反応する。

「ん？」

「あのや、ここ、分からんんだけど。」

「どれどれ。」

別に、成績は良くないのだが、理解をしているので、教えられない事はない。しかし、今は、6限目の自習中。ちよつとの音でも、この教室に響く。強烈な受験戦争に勝ち抜いてきた者がこの学校にいる。偏差値が、当たり前に60以上じゃないと受からない。そんな人達だから、集中力が物凄いらしくて、こうやって、教えていると。。。

「ヤバ、自習は、自分でやるモノでしょ？自分で考えなさい。山名さんも、簡単に教えないの！」

「はあー。」

学級長が注意をした。

「チツ。自分で考へても無理だから、聞いてるんじやん。サイアク
」。

小声で、ブーイングして、また元に戻る。それを何度も繰り返して
行くと、あつという間に自習が終わる。

今日は、補習もなく、すんなり帰れた。いつも友達と寄り道して
帰つて行く様な事はしない。私は、一人でいる時間が好き。だから、
今日も、こうやって本屋に立ち寄る。ここは、大きなビルで、1階
から5階まで、全て本で埋め尽くされた、オシャレな本屋。いつも
の様に、立ち読みにかかる。

「まだ読みかけなのよね。ビーヴィょう、買っちゃおうかな。」

私は、立ち読みをしつぶして、『面白い』と思った物だけを買って、
家に帰つて3回は読む。今日は、何となく気分が乗らなかつた。3
分で1ページのペースも、何故か、今日は . . .

「やーめた。帰ろ。」

私は、本を棚に戻した。変な気分。やっぱり、今日はテンションひ
っくいなあ。

私は、商店街を通つた。すると、人混みをかきわけて、一人の男
子が走つてくる。多分、高校は違うが、同じ高校生だらう。（制服
着てたから。） チヤリン . . .

「あ。」

私の、髪留めが、地面に落ちた。それを拾い、立ち上がつた瞬間 . . .

「うあつ。」

「ああつ！』

ドンと、音がして、彼とぶつかつた。地面に落ちる私。
「すみまない。」

とつさに彼が謝つてきた。私は、制服の土を払つた。変なモノを見
る様な目線で、人々が、一瞬止まって、過ぎて行つた。

「 いじらじや、すみま . . . 」

私は、一瞬息を呑んだ。驚いたからだ。普通、恋愛のパターンで行けば、『カツコイイ』と思つたり、『ドキッ . . . 』などと感想をもらすのだが、まあ、『ドキッ』とはしたが、違う意味だ。走つて来たのは見えたものの、誰か、なんて確認できていない。そのぶつかった相手は、中学時代の先輩。ちなみに、仲が、悪かつた。今更だが、『謝るんじやなかつた!』と、思つた。

「久しぶり。」

「お久しぶりです。」

それだけ言つて、過ぎ去りうとした瞬間、さつと腕を捕まえられて、軽く引き戻された。

「なんでしょう?」(やや睨みながら)

「あのむ、今日、『これからヒマ?』

確かに、予定がなくつてものすんじくヒマなんですが、嘘をついて、「いいえ。これから用事があるんですけど。」

と、なるべく声を荒立てない様にしながら答えた。すると、相手はあきらめると、おもいきや、

「来い。勝手だが、お前しか、今つれる奴がおらんのだ。」

と、一言。

「え? はあ? えちょっと。にゃああああ! - ! - ! - !

そのまま腕を掴まれたまま走つた。店と人が線の様に見える。

「は、離して下さい!」

私は、腕を振つて抵抗するのだが、さすがに強い。止まるうとして

も、自然に足が動いて、どんどんどんどん、前に前に進んでゆく . .

。そして、人が全くいらない脇道に入り、そここの止めであつた車のドアが、タイミング良く開く。そして、私は押し込められて、そのまま車が発進。今、私の脳裏をよぎるのは、『犯罪? - !』『誘拐!

?』『殺人? - !』『拉致られたあ! - ?』 . . .

「大人しくしとけば、何もしない。」

「もうしてんじゃないですか! - ! - !

私は、押さえる手を振払つて、運転手を殴りつとしたが、もつと強く引き戻された。

「大丈夫、落ち着け。」

厳しい表情で私を見つめる。車の後部座席で私は下、先輩が上と言ふ状態で言われた。足で思いつき蹴りあげようとしたら、せつと押さえられた。

「話だけ聞きますから、普通に座らせて下さー。」

なんか、妙なドキドキ感に襲われて、体制を普通にしておいた。すると、すんなり退いてもらえた。

「えー、まず、俺がやつてる事はなんなのか言ひ。

心の中で『犯罪。』と言ひ。

「元に戻る方法だ。」

心の中で『はあ？』と言ひ。

「普通の人間になる方法。わかんねえよな？」

心の中で『もちろん分かりません。早く降ろせよ、『ゴルア（怒）』と言ひ。

「なんとか言えよ。」

「わかりません。全く、ぜんぜん。」（不満げに。）

軽く舌を鳴らすと、相手も不満を持つた様に答えた。

「いひなつてしまつからだ。」

そういうた瞬間、目の前に起こった事が、信じられなかつた。ヒトではなく、彼は、ライオンになつていた。今にも私の喉を引きちぎる様に口を大きく開けて、私の頭に顔を近付けた。

「うああ。。。」

小さく私は、声を上げて、顔を強張らせた。すると、ふつとライオ

ンが歪み、いつものヒトに戻つていた。

「いひなるんで。戻して頂きたい。」

「・・・はい・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3047a/>

* *冬に出会う不思議な恋.* *

2010年10月9日06時04分発行